

KOBE UNIVERSITY



ARCHERY CLUB

★★★★★★★★★★ 目 次 ★★★★★★★★★★

卷頭言	部 長	河本一郎	1
挨拶	弓影会会長	勝部嘉樹	1
祝辞	関西学連委員長	井口吉忠	2
祝辞	体育会副幹事長	川原久幸	3
各代代表の記	初代	勝部嘉樹	4
	第2代	牧野光雄	4
	第3代	西内侃三	5
	第5代	岩永滋	6
	第6代	大谷明	7
	第7代	那須卓司	7
	第8代	御厨秀秋	8
	第9代	室井敏之	9
	第10代	川口幸二郎	10
	第11代	山崎芳樹	11
	第12代	村田克明	12
	第13代	上島二郎	12
	第14代	笹岡信善	13
	第15代	原田和幸	14
	第16代	小川陽久	15
	第17代	秋吉克己	15
	第18代	津田尚	16
	第19代	原口康彦	17
	第20代	小浜透	17

思い出の記	19	回生	広石美恵	19
	20	回生	赤沢実	19
	20	回生	馬詰博	20
	22	回生	勝部勝彦	21
	25	回生	松下和美	22
	27	回生	平木重成	23
	28	回生	山本真理	24
	29	回生	藤本祥子	24
	30	回生	西島優	25

特別寄稿

大阪市立大学	26	成蹊大学	30
関西学院大学	26	帝塚山大学	30
京都大学	27	一橋大学	31
甲南大学	27	桃山学院大学	32
神戸学院大学	28	立命館大学	32
親和女子大学	29	早稲田大学	33
現状報告	第20代主将	小浜透	35
現役の一言	現部員	一同	36
戦績報告			39
編集後記	31回生	川口恭弘	44
		服部由紀子	

巻 頭 言

洋弓部部长 河本 一郎

◇ 怠慢部長の弁 ◇

この夏、数日、家族と白馬山麓のペンションに泊まり、毎日周辺の山に登った。ある朝、6時前に起きて、朝食前の散歩を家内と楽しみつつ、林の中から出てくると、若者達の元気な掛け声が聞こえてきた。見ると、林のはずれの広場に、洋弓場がしつらえられていて、2～30人ぐらゐの青年男女が洋弓の練習をしているのではないか。家内が、「あなたは、アーチェリーの部長をしているそうだけれど、やって見てはどうですか。」という。「いや、おれは全くの名前だけの部長で、アーチェリーはさわったことがない。」といささか申し訳ないような気持ちで、頭をかいた次第である。あれは、どこの大学のクラブであったか、確かめることもせず通り過ぎたが、高原の朝の空気を貫く若い男女の声は、耳にさわやかに残った。

和弓の部長も兼ねている私は、弓道場には、自分用の弓と矢も備えているのであるが、学部長になってからは、大学へはよく出てきていながら、弓をひきに行く機会もなくなってしまった。和・洋両方とも、名前だけの部長になりそうである。それでも、ときどき静まりかえった空気の中に、パンと的を貫く矢の音を想像するときがある。一度、洋弓の感触も試してみたいものと思う。

御 挨拶

弓影会会長 勝部 嘉樹

人生には様々な喜びがあります。中でも人とふれあい、人と力を合わせ、そして共に何かを精いっぱいチャレンジして行くとき、私達は一際豊かな喜びを感じるのではないのでしょうか。

20年前、私は自分自身の楽しみのために洋弓を始め、やがて楽しみを分かち合う喜びを求めて仲間を募り、細やかなサークルを結成するに至りました。しかしながら、最初は何もかもゼロからのスタートです。自由と時間と健康には恵まれても、金だけは無いのが自慢の仲間でしたから、始めは竹の弓と矢を買うのが精いっぱい、他の用具はほとんどが古材を利用しての手作りという有様でした。射場が無いことが最大の悩みでしたから、鴨子ヶ原を切拓いてレンジを建設するという難事業にも、皆喜んで体当り。バイトの収入を持ち寄って資材を購入、

蚊やブヨに悩まされながら汗みずくの土方仕事・大工仕事で何とか練習できる状態にこぎつけたものでした。

洋弓をやるりと集まった仲間でしたが、在学中の大半は、このような基盤造りの作業に忙がしく、むしろ練習が後回しになる位で、とても他チームとまともに対戦するところではありませんでした。

20年の月日を経て、今や母校体育会の一翼を担う立派なクラブに成長した洋弓部を見るにつけ、今日の感を深くしております。それと共に、20年前、あの困難でみずほらしい状態のもとで、実に生き生きと、そして楽しくチャレンジしていた仲間のことを思い出します。一人一人が創意工夫し、そして皆が力を合わせなければ前へ進まない、そんな状況に皆が心をひとつにチャレンジするときのあの心の高まり、一仕事終わった時のあの満ち足りた思いを、何もかも立派に整い、部員70名を越える大運動部に成長した今、現役部員の皆さんは如何に体験しておられるのでしょうか。

祝 辞

関西学生アーチェリー連盟委員長 井口吉忠

神戸大学体育会洋弓部創立20周年を迎えられ、心から御慶び申し上げます。一口に20周年と言いましても、我々学生の年齢とほぼ同じで、その成長過程にはさまざまな困難な時期があったと思われまます。それを一つ一つ乗り越え、ここに20周年を迎えられることになったのも、貴校洋弓部の諸先輩方の努力の賜物だと思ひ敬服する次第であります。

関西学ア連盟も昨年20周年を迎え、貴校洋弓部が加盟された昭和39年には、わずか加盟校10校たらずでありましたが、現在にいたりましては加盟校33校、連盟員1,100人の大規模組織に成長しております。

関西学ア連盟では、来年よりリーグ戦の完全なるA・Bブロック化を実施致しますので、貴校洋弓部は男女そろって1部に昇格することになっています。この20年間達成されなかった1部優勝を男女そろって達成されますことを祈っております。

最後になりましたが、神戸大学体育会洋弓部のこれからの御発展と御活躍をお祈り申し上げます。

祝

辞

体育会副幹事長 川原久幸

アーチェリー部が創部20周年を迎えたことは、体育会本部員として、喜びにたえません。創部20周年といえば、比較的若い、新しいクラブであると言えます。それは、アーチェリーというスポーツ自体、日本に入ってきて日が浅いせいだと思います。若いクラブというのは、古くから培われた伝統がない代り、旧弊に縛られない若々しい創造性に富むという長所があります。それが現在のアーチェリー部の、自由で民主的な雰囲気につながっていると思います。

しかし自由な雰囲気だけでは試合に勝つてゆくことが出来ません。やはり、練習に対する厳しさが必要でしょう。自由な雰囲気と練習に対する厳しさという、相反する課題を見事に調和させているのが、アーチェリー部と言えます。それが証拠に、関西学生リーグの1部に復帰し、旧三商大戦も、昨年・1昨年と連勝したと聞きます。神戸大学体育会のクラブの中で、かなり良い成績を収めています。

アーチェリー部の特徴という、もう一つあげられるのが、人数が多いということです。人数が多いということは、長所もある代り、様々な不都合が生じてきます。その中でも最も深刻なのが、一人当りの練習量が少なくならざるを得ないということです。それを克服するために自主練習に励んでおられることと思いますが、幹部の方々はさぞかし心労が多いことかと存じます。

これは余談になりますが、我が体育会の昭和51年度の幹事長の瀧本さんがアーチェリー部でした。瀧本さん以前にも、幹事長が2人もアーチェリー部から出ている訳です。

最後になりましたが、アーチェリー部の今後の御活躍を祈って、体育会からのお祝いの言葉とさせていただきます。

各代代表の記

初代 勝部 嘉樹

◇ 洋弓部発足の頃 ◇

空いっばいの鱗雲に誘われ、何という当てもないままに、私は馬場の脇の見知らぬ坂道を東に向かってブラブラと下っておりました。

当時の六甲台は、未だ北も東も山林や草原で囲まれ、南は駐留米軍のキャンプ跡地が、芝原と道路だけの広っばいになって残っておりました。雑草に囲まれ、なつかしい香りをただよわせる厩舎と馬場を通り過ぎ、南に未だ真新しい工学部の校舎を見ながら石屋川のほとりに至る頃、川向こうの崖下からスポン・スポンという小気味良い音が断続的に響いてくるのに気がつきました。興の向くまま音のする方へ回って辿りついた所が、一王山のレンジでありました。

大学生活にこれという手応えを見出すことが出来ず、時間と自由を持って余し気味だった私にとって、初めて見るアーチェリーは、適度に緊張と集中を要求され、しかも適度に楽しく取っ付き易い遊びだと思われました。

その当時の一王山は、アイデアマンの笠原会長を中心に道永氏や鯛中氏など気さくな会員方により運営される、家庭的なクラブでした。若々しく精悍な風貌の道永さんにご子息があって、後に世界選手権で名を馳せる名選手に成長されることや、気の良いタバコ屋のオッサンという感じの鯛中さんが当時関西棋院の若手ホープで、後九段になって活躍されるなど、当時はいささかも知らず、厚かましくもぐり込んで行った私に、皆さんは嫌な顔ひとつせず、道具を貸し与え、懇切にご指導下さったものでした。これらの皆さんを始め、同レンジを借りておられた甲南大の伊藤氏や後藤氏他の諸兄のご恩も忘れることが出来ません。

こうして弓を握り始めて約1年後には十数名の仲間と、珍しい竹の開花が見られる浜松のヤマハレンジで初合宿を持つところまで行けたのも、これら親切な先輩や隣人方のご援助のお陰と、今でも深く感謝致しております。

第2代 牧野 光雄

洋弓部創立20周年おめでとうございます。我々12・13・14回生が御影学舎(当時の教養部学舎)の東角で12人の同好会としてスタートして早や20年、肉体的にも精神的にも

当時と変わらないと自負している私にとっては何とも短い20年です。

同好会当時の竹矢作戦、技術も金もない我が竹の弓・竹の矢で初めて畳に向かった時のこと、年間9千円の授業料を納めずに1万円のグラスファイバーの弓と千円の矢を使った時、又その矢が石に当たって曲がってしまった時のこと、浜松日本楽器レンジでの第1回合宿、集会場での新入生歓迎コンパ、大学祭のおにぎり屋……etc。どれをとってもアーチェリー、弓影会の友人が与えてくれた掛け替えのない青春時代の楽しい思い出です。

13回生は私のみという事で、1年間洋弓部のキャプテンを勤めました。当時技術面の指導は全くなく、何事もお互いに良と思われる方法を試す、良ければ採用するという具合、且つアーチェリーという新しいスポーツ、外部から「遊び」と見られるのが不満で、運動部である限り、基礎体力と精神力とばかり、毎日鴨子原一周ランニング、腕立伏何十回、立つ事と走る事が練習、あとは如何に洋弓部という共同生活の場を楽しくするかが私のリーダーとしての活躍であった様に思います。

その様な私に、卒業送別の記念品として後輩にもらったヘアードライヤーが今も毎朝私の多少白いものが混じる頭を整えてくれています。今の調子では30周年・50周年の時も、アーチェリーと学生生活と私の頭を美しく整えてくれるものと思っています。

第3代 西内 侃三

神戸大学洋弓部創設20周年おめでとございます。ついこの前10周年の原稿を依頼されたと思ったのに、もう20周年。本当にあつという間である。考えてみれば、小生も社会人15才。人生38才の中年。社会人になる迄は、小学校・中学校・高校・大学と区切りがあり、振り返れば、22年間の歴史が辿れるが、社会人になってからは一日一日を処理している感が強く、あつという間の15年であった。

小生にとって、大学時代、なかでも洋弓部に関わった4年間で非常に思い出深い充実した時期であったと思う。10周年誌に書いたことの繰り返しになるが、勝部・牧野両先輩の下、我々14回生が手足になり、洋弓そのものの練習はさておき、レンジ・部作りに専念、特に鴨子ヶ原レンジは、日の神教(?)の前の山地を借り受け(当然タダ)、その年の夏は全員手弁当でレンジ作り。事務系は資材の無償調達、技術系は設計・施行と手作りの見事なレンジを完成された。その後、同好会から部への昇格、関西学連への加盟。鴨子ヶ原レンジを追われてのジ

ブシー生活等々。思い出はいろいろ多いが、洋弓という競技そのものより、洋弓部の体裁を整えるため、全員協力して物事にあったことが今でも強く心に残っている。

最近、報告書で後輩諸君の活躍を読ませて頂いたり、又、遊園地の洋弓場を見て腕がなる(?)程度で申し訳ないが、洋弓は小生の頭の片隅に移ってしまっているのが実状である。我々年寄りの思い出多い洋弓部を強い部に育てて行って頂きたいのはもちろんであるが、卒業した後も、青春の一里塚となるような、他の学校・他の部とは一味ちがう部に育てて行って頂きたい。

今後の後輩諸君の活躍を。洋弓部の発展を!!

第 5 代 岩 永 滋

洋弓部創設20周年、誠に感慨深いものがあります。現役時代の思い出は、泉の如く尽きないのでありますが、卒業後何気なく引き受けたOB会の幹事としては、怠慢により皆様にご迷惑をかけ、反省する事、身の縮む思いであります。

各代の代表の記は20周年の歴史でありますので、我々の一エポックを紹介致します。

部創設の次の年、入学時の勧誘に負け、何気なく入部したのが、苦しく且つ楽しい洋弓部生活のスタートでありました。

当時レンジは御影(鴨子原)の私有地で、見晴らしの良い所にありました。まだ近射しか許されていない我々は、先輩の目を盗んでは、30mの試し射ちをやったものであります。的の後ろは人家で、庭先に射ち込んでひゃっとしたものでありました。このレンジが使えなくなり、ジブシー生活が始まりました。体育館の裏、教養の教室の横、本部グラウンドの隅を経て理学部前の空地へと移りました。レンジ作りは上達しましたが、弓の方は、さっぱりでありました。

弓具については、付属品は全て自分達で作りました。レストは眉ブラシで、クリッカーは物指して、スタビライザーはフィルム罐に溶かし込んだ鉛の塊で、といった具合であります。矢もオンラインの時に有利という理由だけで、19-13という太いものを買いました。この矢を使って当時の主将西内さんが記念すべき300点(もち論30m)を出したのであります。指の豆をつぶし、血だらけになりながらの達成は、我々一年生にとって感激でありました。

こうした苦勞と改善とチームプレーのお陰で、その後めきめき腕をあげ、一部入りを達成し、

神大ここにありといった勢いでありました。今や弓具と技術の進歩で、当時とは比べものにならない程、高得点が出ている様であります。いつの時代でも相手を制するのは、努力とチームワークであろうと思います。現役諸君の活躍を期待致しております。

第 6 代 大 谷 明

卒業して早や12年。一通称“会社の中堅”、自称“会社の大堅”一として、日々ドタバタした生活である。アーチェリーとは、とんと御無沙汰である。

毎年、会社に「現況書」なるものを出す。この時、趣味・スポーツの欄に何も書かぬのは恰好がつかぬため、極めて遠慮がちに“アーチェリー”と書かしていただいている。誠に不謹慎なOBであります。

会社の仕事は、クレジットの法務関係である。在学中は練習に明け暮れ、勉強しなかったが、今となって、一生懸命に本を読んでいる。河本先生の御本で、「商法改正一単位株制になれば、会社としてどう対応するか。etc」も現在吸収中。

家電製品は三洋を。お支払いは楽なクレジットをどうぞ。契約書は小生の作であります。

卒業後12年も経つと、六甲台の、そしてアーチェリーの世界も、小生の時代とは様変わりであろうと思う。仕事に追われたガサツイ生活をしていると、真黒に日焼けして練習にうちこんだあの時代がなつかしい。

「中途半端なことはするな。やるからには徹底してやりとげよ」……このことは、クラブ活動・勉強そして仕事のいずれにもあてはまることと思う。

現役諸君、頑張ってください。

第 7 代 那 須 卓 司

洋弓部創立20周年、心よりお祝い申し上げます。ふりかえれば、早や卒業以来11年の歳月が過ぎてしまいました。今では、我が青春を過ごせし神戸の町、六甲山、大学のキャンパス、洋弓部レンジ等も、すでに過去のなつかしき思い出のひとつとなりつつあると言っても過言ではありません。本稿を書きながら自由闊達に過ごした大学生活、洋弓部生活を思い出す一方、

現在の、会社・仕事に埋没した小市民的日常生活を反省させられております。少なくとも、4年間過ごした大学生活、なかなく洋弓部生活には、おおげさに言えば青春の命をかけ、燃える何かがあったように思われます。この意味で、4年間の洋弓部生活は、貴重な体験であったと思っております。

さて、最近の洋弓部の現状については、戦績等その都度連絡いただいております、後輩諸君も日夜練習に励み、又洋弓部生活をエンジョイされていることと推察致しております。我々が過ごした4年間の顧みれば、いまだアーチェリーも現在程普及しておらず、国立大学で満足な部として存在していたのは、神戸大学だけでありました。又、弓具も現在から見ればお粗末なものであり、レンジも満足なものではありませんでした。しかしながら、今から思い起こせば劣悪な環境は、むしろ人間のやる気・向上心・闘争心ををかきたてるものであり、洋弓部生活をエンジョイする妨げとは無関係であったと言えます。又、洋弓部には今でもそうだと思いますが、体育会の中では、伝統的に最も自由闊達な雰囲気がありました。この良い伝統は今後共引き継いでいてもらいたいものです。

卒業以来ずっと東京勤務の為、なかなかレンジに顔を出す機会がなく、又、OBとして今まで何の援助もできなく申し訳なく思っております。4年間同じ洋弓部に在籍した者同志の絆を社会生活の中でもより一層深めたいと考えておりましたが、この20周年記念行事を一つの契機として、今後交流を深めて行きたいと思っております。神戸大学洋弓部の益々の発展と現役諸君の活躍をお祈り申し上げます。

第 8 代 御 厨 秀 秋

◇ 熱き血潮のリーグ戦 ◇

洋弓部創設20周年、誠におめでとございます。諸先輩方の尽力と後輩諸君の研鑽努力によって、クラブの成人式を迎えます事は、誠に意義深い事と喜びにたえません。

大学の4年間は、クラブと共にあり、多くの想い出に満ちています。その内で最も印象深いのは、4年春のリーグ戦です。

3年迄の成績は5位・6位を低迷し、いつも入替戦の恐怖に直面してぐやしい思いをしていました。そこで自分達のチームになってからは、兎に角1点差でも良い、勝つアーチェリーをしたいと考えていました。

幸い20回生に優秀なアーチャーがずらりと揃いました。赤沢君・馬詰君を筆頭に玉井君・津田君・高見君・下村君をして惜しくも亡くなられた故中本君達がレギュラーとして活躍してくれたのです。

結果的にはホイット軍団！王者桃山には苦杯を喫したものの残りの試合は執念の僅少差でものにし、1部第2位という満足できる成績を残せました。今でもあの時のリーグ戦の熱い気持ちをなつかしく思い出すことがあります。ホイッスルが鳴り、陽光をいっぱい浴びた面に矢が勢いよく吸い込まれる。10点！「ヨッシャー！」これを合図に次々と金的に矢が吸い込まれる。2的玉井君のクリッカーが落ちない。「おちついて行け」1分前の声がかかる。まだ2本残っている。心配そうな眼。ところがどうだ、見てくれよとばかり放った矢は10点！10点！「ヨッシャー」「ヤッター！」皆大騒ぎ、私も目がしらが熱くなる。「ヨシ、バック」あの熱い想いをもう一度味わいたいと思っている今日この頃です。

神大洋弓部の益々の発展をお祈りします。

第9代 室井敏之

20周年、心からお祝いを言いたいと思います。最近の団体戦の報告を拜見しますと、試合でも4700点台が出ている様で、レベルの向上が感じられます。又、来年度からはブロック制が導入され、男女共に一部リーグで試合が出来るとのこと、大変嬉しく思います。競技をする者として、一部リーグで強いチームと対戦できることは大きな喜びでしょう。

さて、我々20回生13名のことを書きます。1年生の時、約60名が入部しましたが、多すぎてトレーニング等でしごかれ、4年生の時には13名でした。我々が3年生の時と4年生の時、2年連続一部リーグの2位になりました。1位は当時全盛の桃大でした。今でも忘れられないのは4年生の時のリーグ戦最終戦で、桃大と全勝同士で対戦した試合です。我部は、当時の試合でのクラブ新4601点を出しましたが、4731点(当時の団体戦日本新)の桃大に敗れました。試合後、皆の目に涙が浮かんでいたのを覚えています。又、個人では、赤沢君が日本新の1234点をマークし、新聞紙上を賑わし関西スポーツ賞も受賞しました。この様に、我々20回生は素晴らしい活躍ぶりでした。(筆者は残念ながら余り活躍できませんでした。念のため。)

しかし、何と言っても一番の喜びは、一緒に練習や合宿で汗を流した先輩・同輩・後輩と素

晴らしい仲間ができたことです。この素晴らしい仲間にも悲しい出来事がありました。50年に、20回生の仲間、中本将人君を心臓マヒで失いました。中本君をご存知の方は、20周年を機会に、もう一度合掌してやって下さい。

ところで、最近の練習や合宿の様子をお聞きしますと、我々の頃と余り変わっておらず意外に思い、又、嬉しく思いました。これからも現役諸君・弓影会、力を合わせて、洋弓部の輪をより一層大きく強いものにして行きたいと思います。最後に、皆様のご健康と益々のご活躍をお祈りします。

第10代 川口幸二郎

◇ アーチェリーとの出会い ◇

私とアーチェリーとの出会いは、高三の時に遡る。神大を志望する友人が大学を見に行かないかと言う事で、当時志望校を決めかねていた私は、何となく同行したのであるが、六甲台から見る景色の良さに即座に神大を志望する事にした。その時、眼下に練習風景を見て、「これだ！」と思った。

大学に入れば何かスポーツをやりたいと思っていたのだが、体力にあまり自信はないし、他のスポーツでは、中学・高校からやっている連中とハンディがつく。その点、アーチェリーなら静かなスポーツだし、体力もあまり関係ないだろうし（後から思えば、非常に甘い考えなのではあるが）、その上、経験者もいないだろうという事で、合格すれば洋弓部に入ろうと決めたのである。大学を景色で決めたり、受かりもしないのにクラブを決めるとは、のんきなものである。

そして、入学と同時に、予定通り洋弓部に入ったのであるが、私達が入った44年は大学斗争が一番激しかった時期であった。我が神大も休校中であり、入学式も中止であった。そんな騒然とした中で、毎日練習に明け暮れたのである。レンジの横をデモる学生達を見ながら、私自身、こんな時期に果してクラブ活動に没頭していいのかと悩んだりもしたものだが、もし洋弓部に入っていないければ、休校中の事、大学に来る事もなく、より不安な思いをしたに違いない。

生い茂った草むらの中で、蚊に食われながら来る日も来る日も素引きの繰返し。一体いつになったら矢を射てるのだろうか、僅か20～30m離れた所で射っている先輩達を、何か遠い

ものように感じてはいたが、少なくとも、太陽のもとで体を動かしている実感はあった。体を動かす事の少なくなった現在、当時の事が懐かしく思い出される。弓を引かなくなって久しいが、たまには、青空のもと、ゴールドをめがけて矢を射てみたいものである。

最後になりましたが、20周年おめでとございます。神大洋弓部のますますの発展を念願しております。

第11代 山崎芳樹

創立20周年、おめでとございます。日頃OB活動にも御無沙汰して申し訳なく思っております。さて昨今は洋弓のレベルも上がり、我々の頃では夢のような得点を競っていると聞いております。丁度、私の通勤途上にある大学のレンジがあり、よく練習風景を見かけますが、あらゆる装備を施されたボウとそれを射る学生のスマートさにいつも感服させられております。クラブ活動も時とともに移りかわってきているのでしょうか。ともあれ、我洋弓部が20もの年輪を刻むことができたことは、クラブに携わってきた者の一人としてこんなにうれしいことはありません。この伝統を決して絶やすことのないよう、先輩は後輩をしっかりと育成して欲しいものです。

月日の経つのは早いもので、我々も学窓を巣立ってから7年にもなります。たまたま、同期生も在京者が多く、集まるといつもクラブ談義に花が咲きます。入部早々、恐い先輩達(本当はとてもやさしい先輩だったのですが)の居並ぶ前で、恥も外聞も忘れて大きな声で「チュワー」といって発声練習をやらされたこと、又、世の学生達は夏休みだというのに、うだる暑さの中で、ヌレタオルを頭からかぶり練習に励んだこと、あるいはコンパでジャンケン酒を飲まされ、いつも負けてばかりで、初めて酒のうまさと苦さを味わったこと等々……時間の経つのを忘れてしまいます。多分にノスタルジックな面もあるのですが、社会に出てみて初めてみんなクラブの良さを実感したのではないのでしょうか。

青春の一時期をいかに過ごすかは、その後の人生に大きな意義を持つと思います。勉学に励むのも、あるいは遊びほうけるのも、一つの学生時代の生き方だとは思いますが、私は、利害関係のない一つの目的を持った集団ともいべきクラブを通じて、思いっきりチャレンジして時には考え悩むのも意義あることだと思います。

第12代 村田 克明

◇ 洋弓部創立20周年に寄せて ◇

洋弓部創立20周年おめでとうございます。早いもので卒業して7年になります。現在は仕事の関係で、九州・大牟田に住んでおります。神戸からはかなり離れており、大学を訪れることも全くなく、毎年送られてくるリーグ戦戦績や名簿をなつかしく見ております。

卒業後は弓を握ることもほとんどないのですが、弓だけは大事に押し入れにしまっています。

最近では、アーチェリーもかなり普及してきており、大牟田でもアーチェリー教室なるものが時々開かれています。私も昨年一度だけ、地元のレンジに行き行って射ったことがあります。インドアで15m位しか距離もありませんが、半日久しぶりに楽しみました。しかし、翌日の肩の痛みは少々こたえました。

洋弓部での思い出もいろいろありますが、何といても一番の思い出は、リーグ戦二部で優勝し、一部へ昇格した時のことです。部員全員が一丸となり、一戦ごとに力をつけ、あれよあれよという間に優勝してしまったのです。祝賀会では大いに酒を飲み、酔いつぶれて後輩の肩を借りて自宅まで送り届けてもらったことを今でもよく覚えています。

4年間のクラブ生活で得たものは、何といても、チームワークの重要性です。大勢の部員をまとめていくには、何といても“人の和”が大切です。チームワークこそクラブ生活の上で一番大事なことであり、ひいては、社会生活においても重要なこととなるのです。

大いに酒を飲み、マージャンをし、すばらしい友情を育て、そしてすばらしいチームワークを身につけてくれることを後輩諸君に望みたい。

最後に、洋弓部の今後ますますのご発展をお祈りします。

第13代 上 島 二 郎

20周年、おめでとうございます。8月18日P.M.3:00、この原稿を新幹線の車中で書いています。

早いもので、卒業してから5年半になりました。ずっと大阪勤務であったのが、転勤で8月12日東京へ来て、今日がはじめての帰阪です。(すこし帰るのが早すぎるのじゃ?)

3回生の時、東京遠征に参加して以来ですから、7年振りの東京なので、はじめて来たのと同じ事。(サラリーマン、辞令一枚西東、明日は何処へ行く身やら)、東京は広いですね。

話は戻しまして、前述の東京遠征ですが、49年秋、成蹊大との定期戦（負け）と三商大戦（2位）のため東京に来ました。

残念ながら、戦績は上記の通りでしたが、大きなトラブルもなく終わりました。（マネージャーに感謝。レセプションは共に勝。）

小さなトラブルは、私の弓（ホイット中古35ポンド）が、三商大戦の付矢の最中、メキメキと大きな音をたてる事もなく折れてしまったのです。なんというわが腕力、35ポンド真二つ、（外野席一あの弓は33ポンドぐらいしかなかったよ。素引き用じゃなかったの？）。やっと涙なしに語ることが出来る様になりました。

学生時代の4年間を過ごした洋弓部の思い出は、なつかしくもあり、又、埋没しかねない日常生活をフレッシュな感覚に引き戻してくれます。

つまらない事ばかり書いてしまいました。最後に神戸大学洋弓部が、20周年を期に、より一層飛躍される事を祈りまして筆をおかしていただきたいと思います。

第14代 笹岡 信善

◇ 神大洋弓部での思い出 ◇

3年余りの神大洋弓部生活について思い出せば、私は入部当時、人一倍練習嫌いであった。ただ毎日素引きをシトレニングだけの練習が。自然と練習にも身が入らず、夏合宿でもまだ素引きをしていた。上級生から矢を弓から放つことを許されたのは、秋の新人戦の前日。新人戦での成績も確か下位の方であった。そして、シーズンオフの冬の基礎トレだけの練習開始。この頃もやはりアーチェリーというスポーツ、練習をおもしろくなく思っていた私だが、不思議とクラブから去ることはできなかった。親しくなった仲間達を失いたくなかったのだろう。

練習嫌い、ただ仲間と語り合っているのが好きだった私が、練習に身を入れ出したのは、幹部になる直前の頃からだ。弓の腕前は仲間達より下手くその私が、何故か主将という役職を努めることになった。当時、仲間の女子リーダーは世界選手権出場という実力の持ち主。よく彼女と主将を交替してはと言われたものだった。でも幹部となり主将となる私は、60数名の洋弓部員を一つにまとめ、男子一部復帰、女子一部優勝という目標に向かって進まなくてはならなかった。そんな気持ちで練習していると、今まではただ漠然と矢を射っていたのが、練習中欲が出ていたのか一本でも多くの矢を金的に射てやろうと思いはじめた。そして、リーグ戦で

当初の目標は果せなかったが、最終戦で600点upを出した時の気持ちは、今でも忘れられない。

とり止めもなく自分自身の思い出を述べて来たが、私は神大洋弓部を通じて得た、同じ思い出を持つ仲間達との交流を、今後も尚一層深めていきたいと思い、又、そんな良き仲間達を得られた事を嬉しく思っている。

第15代 原田 和 幸

はやいもので、我々の代が幹部の時に15周年のレセプションを催してから5年がたちます。その折、歴代の先輩方にお会いし、部の歴史の重さを感じましたが、今、さらに5年の厚みを増し、ずっしりという感じがします。

5年前に、10周年の記念誌を探し出して、部創設期の話を感動を覚えながら読んだことが思い出されます。この記念誌も各代の人々に様々な思いを呼び起こすことでしょう。

さて、私がこの20年の歴史の中で現役として関わった時期は、弓具の発展に目を見張るものがありました。今では極く当り前になったテイクダウンが出始めて、1年のころは木製のホイットが素晴らしくかっこよく見えました。それが3年のころには、色とりどりのTDばかり。そして、矢もカラーシャフト。宇宙工学応用のケブラー弦、ブラ羽根からFFP、さらにはヘリカルフレッチ。スタビも、ロングからVバー。クシヨンプランジャーの普及等々。年々本当にカッコよくなる一方。どれをとっても金のかかる物ばかり。とはいってもカッコも決めたいし、金欠症の私は、アーチェリーとはブルジョアのスポーツかと嘆いたものでした。

丁度そのころ、アーチェリーショブの御曹子という地位をフルに利用して(独断と偏見)、道永宏君がモントリオールで銀メダリストとなり、松下先輩がスイスの世界選手権に出場されました。また、今は女優の相原とも子こと原かよ子が関西アーチェリー界の花として活躍したのもそのころ。テレビといえば、「ラブアタック」で我同期の葛原氏が兄弟揃って恥を晒し、愛弟子奥野嬢が笑顔を振り撒きました。これも神大洋弓部の歴史なのです。私といえば、歴史に名を残すことは何もやっていない。嗚呼、口惜しい。後輩諸君、今からでも遅くない。代々言い伝えられるような大物になれるよう、アーチェリーにでも他の事にでもいい、精一杯努力しよう。

第16代 小川陽久

早いもので、私が洋弓部を引退してから、もう4年の月日が流れてしまった。それだけ私も年をとったということだろうか。

入部した頃は、まだ現在の教養部のレンジはなく、理学部のレンジで練習に励んでいたものです。あの頃から、人数ばかり多くて、諸先輩方もなかなか練習に苦労しておられた様です。思えば、あの理学部のレンジから偉大な先輩達が数多く卒業していかれたが、中でも、現在もお兵庫県連の第一人者として活躍しておられる、かつての世界記録保持者の赤沢実氏、女子の日本記録保持者で、世界選手権にも出場された松下和美さんのおふた方は、かつての強い神大の象徴であり、私の最も尊敬する先輩の一人です。

狭くて練習しづらいレンジではあるけれど、今後も20周年を契機として、あの先輩達の様なすばらしいアーチャーが輩出することを、そして、神大洋弓部の一層の発展を願っています。

第17代 秋吉克己

◇ 離れたくない! ◇

クラブを離れて早2年、卒業しても弓だけは続けていこうと思っていたのに、一旦弓中心の生活を離れてしまうと、昔の情熱を持ち続けるのは難しいものです。

卒業してすぐ仕事の関係で東京へ出てきたのですが、全国的に見てアーチェリーの盛んなはずのこの地でも、レンジやプロショップなどがそうそう多くあるわけではありません。重たいタックルケースを下げて電車やバスを乗り継いで遠いレンジまで通うのはけっこうしんどいものです。ゴルフバックを抱えて電車に乗っている人を見る度に、ゴルフもアーチェリーも車でも持っていないとやれるスポーツじゃないなと思ってしまいます。

加えて情報の少なさ。せいぜい雑誌アーチェリーを読むくらいなのですが、これがなかなか普通の本屋にはないんです。そんな訳で、ここ1年か2年ほどで大きく変わってきた弓のチューニング等も、初めて見てびっくりする事があります。

こうしたなかで弓を続けていくには、やはり、かなりの情熱をもっていないと難しいようです。そういう点では、学生の皆さんはかなり恵まれていると思います。私自身学生の頃にわからなかったことですが、外に出てみると学生アーチャーの皆さんが羨ましく思われます。

ともあれ、何としてでも弓と関わってゆきたい。練習不足で、十数射射つともう肩がつかっ

てくるような状態でも、よっしゃもう少し練習つんで、今度のボーナスでは新しい弓でも買ったろと思ひながら、最近一段と遠く見えるようになった的に向かっています。

私達OB・OGも現役の皆さんに情熱だけは負けたくないと思います。また、何らかの形で今後も弓に関わってゆきたいとも思っています。弓影会の皆さん、押入に眠っている弓があったら、一度取り出して昔の情熱を思い起こしてみませんか。

第18代 津田 尚

神大洋弓部創立20周年、心からお慶び申し上げます。

20年という歳月の中で、神大洋弓部もさまざまな推移を経てきたことと思います。我々同期(29回生)が入部したのが4年前、当初は新入部員だけで20数名、2回生の時点で現在の18名になりましたが、3回生の時には部員総数が現役だけで60数名という大所帯でした。比較的部員数の多いクラブということで代々受け継がれてきた「和」を大切にすゝる気風の中で、自分たちも和気あいあいと伸びやかにクラブ生活を送ってきましたし、知らず知らずのうちに次の代へと引き継がれていくことと思います。

卒業して5ヶ月余り、懐かしむにはまだ早いですが、厳しくもあり、また、たいへん愉快でもあった先輩の方々の指導の下に過ごした1・2年。何も考えずただひたすら励んだ日々の練習、年2度の合宿、東京遠征等の定期戦、そしてリーグ戦、拾い上げれば切りがありませんが、とりわけ苦い(また楽しくもあったが)記憶として残っているのは、第18代幹部として送った1年間だと思ひます。入部した春のリーグ戦で女子が1部から落ち、以後男女とも1部復帰をめざして頑張ってきたにもかかわらず、2部に低迷しているという現状でした。我々も1部復帰を目標に掲げスタートしたわけですが、結果的には惜しくも2部残留。今から思えば悔いは残りますが、伝統の重みを感じつつもよくやってこられたなあと思ひます。とにかく失敗談の尽きない1年間でした。

最後になりましたが、過去に優秀な選手を輩出してきた伝統ある神大洋弓部。その伝統を受け継ぎ、さらにはより一層の今後の御活躍を期待し、且つお祈り申し上げます。

第19代 原口康彦

「1部昇格ノ1部昇格ノ」と呪文のように唱え続け、そして、とうとう果たせぬまま引退を迎え、クラブの思い出を語るには、あまりにも印象が生々しく、かと言って現役でもないという中途半端な状態に置かれているのが私達4回生の現状です。あえて今、クラブの感想を語るならば、神大洋弓部をこよなく愛している先輩や同輩や後輩に恵まれて、大変に楽しいクラブ生活を送れて満足でした。

もっとも、練習では、歴代記録を更新する4948点まで出しながら、試合で弱く、リーグ戦においてクラブ史上最悪の成績しか残せなかったことが、非常に残念でなりません。しかし、私達19代幹部としては、やれるだけのことはやったという気持ちもあります。綿々と続くクラブの歴史の中で、常にそうであったように、私達が先輩から引き継いできたクラブの伝統は、後輩がしっかりと引き継いでくれています。10周年の記念雑誌を読むと、長い間に少しずつ変わってきた部分もあるようですが、結束力が強いことやクラブの雰囲気などがやがて且つシビアなことなど、本質的な部分は変わっていないと思います。現役生活が終わり、今は20代幹部、さらにそれに続く後輩達に大いに期待しています。

今年度からリーグ戦の形式変更ということで、神大洋弓部は、男女とも1部リーグに所属することになります。学生王座校の近畿大とは、現在かなりの実力差があるのは事実ですが、いつの日か我等神大洋弓部が学生王座を手にするのを夢見ています。

第20代 小浜透

神戸大学体育会洋弓部も、いよいよ20周年を迎えることとなりました。ひと口に20周年と言いましても、現在のように部員一同が一心に練習に励めるのは、先輩方のはかりしれない御苦労のたまものと思います。ここに20周年を迎えるにあたり、先輩方に改めて感謝いたします。

さて、わが部はリーグ戦ブロック制の導入によって、本年度より1部に復帰することとなりました。次のリーグ戦より関西の強豪相手に戦える位置にきて、部員一同、非常にはりきっております。

この20周年を一つの節目として、先輩方の御期待にそうように、さらに飛躍していく決意ですので、より一層の御指導のほどよろしくお願い申し上げます。そして、できましたら、部室・レンジの方にも気軽に遊びにいらして下さい。

最後に、各校洋弓部並びに学連役員の方々には今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

思 出 の 記

19回生 広石美恵

洋弓部20周年おめでとうございます。ついでに、記念誌に寄稿するよりのこと。クラブのことを思い出そうにも、ハヤ一昔前のこととなり、記憶も薄れ、心もとない限り。その中でクラブを思い出すたびいくつか苦いものがこみあげてる、そのことなどをつらつらとかきながってみたいと思います。

その1 「4年間ただクラブに在籍したいというのみで、さしたる力もつけられなかった事」 持続すること、それのみでは何ら自分自身のためにはならなかった。そのまっただ中では、一人前に「押し手が弱いナ」「背筋が使えていないし…」「もっと弓の手入れを!」「トレーニングもまじめにしなければ」etc etc etc と、思い悩んでいたはずなのに、実際は、なんとウカウカと日々を過してしまったことか!

記録を残すことだけがクラブではない!? そうとも思いました。でも自分の問題として貴重な時間(今思い出せば何と勿体なかった日々よ)をさいて取り組んだ弓なのに……! 納得できる記録が残せず口惜しいこと限りなし。

その2 女子リーダーとしてその任務を全うできなかったこと。(しかしまたその立場のあいまいさよ) ひとりひとり有能な人間の持てる力を発揮させ、かつ統括していかなければならなかったものが、その任を自覚していなかった。(大体わかるのが遅いのです、いつも)

反省が今に生きればいいのですが、そううまくもいかず、いたい放題で失礼します。

20回生 赤澤 実

卒業してはや10年が経とうとしている。思えば洋弓部に入学し洋弓の単位をとったような大学生活であった。私はいまだに弓は続けていて試合にもよく出る。が、日頃の怠慢もあって、やはり力の衰えはかくしきれない。おかげで昨年は国体の選手になれず監督で参加することになってしまった。今年も残念ながらその予定である。

先日、8月6日にはじめて今のレンジに行き、部員の方々と練習させてもらった。あのせまいところによくもまあ……という感じであった。我々のときは、理学部の北の広場(当時ただっぴろい空地があった)に仮設の三脚をズラーリとならべていた。下にいると雨のかからな

い大きな杉の木。夏ともなれば蚊の大軍のいる近射のタタミ。的からはずすと矢の様相が変わってしまい後方の石垣。そこに、めんどうだからといって三脚にタタミを1枚だけの設定、同期の馬詰君と90mを射ったこともある。

トレーニングといえば思いですが、入部してからすぐに行なわれたレンジからケーブルのりばまで往復のケーブル下コースのランニング。これが連日続いた。「ずいぶんとしんどいことを大学のクラブはするのだなあ」などと思いながら必死で走ったものだ。それまで運動らしいものはやっていなかった私にとってはよくこたえた。

聞くところによると何でも、新入部員が多く入りすぎて何とか減らそうということで上級生もがまんしてこのコースを選んだとか。おかげで、いっとき60人を数えた新入生も20人ほどに減ってしまった。2年の途中から大学封鎖が行なわれ、授業を非常に受けたかったのだが開講されないのでしかたなしに、毎日のように練習をしていた。やはり練習をよくするとあたるようになるものだと今でも思う。

最後に現在の部員に一言。洋弓を射つのを楽しめるほどによく練習して、4年間最後まで続けてほしい。いや、それから先も何とか続けてほしいと思う。

20 回 生 馬 詰 博

あれからもう10年がすぎってしまったのか。忘れもしない昭和46年5月5日。リーグ戦の最終日である。対桃山学院戦、互いに全勝でむかえた優勝校決定戦である。いや事実上の王座決定戦であった。(その頃は関東より関西の方がレベルが高かった。)

内容は50mの5回目までは少差の緊迫した試合であったが、6回目に大きな差をつけられてしまい、30mでは差が大きくなるばかりであった。結局、我々は試合におけるクラブ記録を出したにもかかわらず負けてしまっ。私自身調子は悪くなかったし、まずまずの点数であったと記憶している。しかし、勝敗の分かれ目となっ50m6回目に2時の黒点をうってしまい、敗北の一因となってしまった。

試合に負けて悔しかった。試合後のミーティングでは、ひとりてに涙がほほを伝った。悔し涙であった。と同時にその涙は安堵感の涙であった。試合目ざして自分がそれまでやってきたことが次々と頭の中にかんできて、「リーグ戦は終わったんだ。」という安堵感の涙であった。今となれば全部をつかしい思い出である。

現在、神大は二部リーグであるが、早く一部への復帰をしてほしいものである。むろん我々

の頃とは洋弓界のレベルそのものが大きくちがっている。ただし、ここで気をつけておいてほしいのは、結果だけを追い求めるのはやめてほしい。

大切なのは、結果だけでなく、その結果を求めるために、いかにその人が努力したかという途中の過程なのである。いかに人事をつくしたか、いかに行動したかということが大切なのである。読者の中には現実の社会と比べて、甘い考えだと思われる人がいるかもしれないが、学生時代は別にそれでいいではないか。人生は長いのだから、そういう時代があってもよいと思っている。

現役諸君、頑張ってくれたまえ。

22回生 服部勝彦

我ら22回生の洋弓部生活は、栄光と屈辱と苦悩と喜びの交錯した人生の縮図とも言えるものであった。

— 栄光の時代から屈辱へ、苦悩の時代 —

20回生の栄光一部二位を一回生で味わった我々は、幹部交替後の立大定期戦で11人集まらず10人で戦い、エイトで3800というどん底のスタートを切った。練習でも5、6人しか集まらない毎日、土曜日でもエイトがとれない状態。クラブ生活が無意味なものと思われ、同期が一人二人と退部していく。その者達を説得できず自分自身に嫌悪を覚えた日々。クラブの雰囲気が悪く、学生生活自体が沈んでいく。我々皆が苦悩し、幹部の信任問題、体育会からの脱会、同好会への転換を真剣に討論した。—「クラブは勝利を目的としているものであり、勝たなければ楽しみはない。」「クラブは和気あいあいとやるのが第一義であり、勝負は結果に過ぎない。」という二つの意見の対立—その結果、異例の期中での幹部更迭、体育会洋弓部としての再出発を確認した。しかしこの時、同好会への転換を主張した同期がまた次々と退部。学生スポーツの本質に迫る問題について若き日々に悩めただけで、今から考えれば充分洋弓部に入部した甲斐があったと思っている。

春のリーグ戦全敗による屈辱的な二部転落。先輩諸氏から「この苦しさを忘れるな、捲土重来を期せ」と言われても不思議に悔しさがなかったのは、私自身のクラブの考え方が先輩諸氏と違ったからか。

— クラブ民主化とささいなる喜び（自己満足） —

そして我々が新幹部に就任。クラブの民主化という名のもとに、合同練習を週二日制とし、

(それまでは毎日が合同練習)雑用の公平化をはかり、幹部がよく曇を運んだものだ。クラブ員を増そうと、新人勧誘に必死になったっけ。先輩からの「現役の間は、洋弓部内での異性と恋愛はご法度」という不文律を崩そうとも努力したっけ。リーグ戦では、常時一人しかエイトに参加できなかった弱体幹部だったが、我々によく従ってくれた28回生、インチキな技術を教わりながらも頑張ってくれた24回生のおかげで、春のリーグ戦追大から一勝を上げて、二部残留を決めたとき、うれし涙をこらえきれなかった10年前の話が、つい最近のように思い出される。よき思い出として、我々22回生は、弓を通じてよき人間関係とわずかな勝利を両方とも経験できたのだ。

最後に洋弓部、20周年おめでとうございます。洋弓部の発展を心から祈って、真夏の夜の回想に終止符を打ちたいと思います。

25回生 松下和美

卒業してから？年もたつというのに、今だによく覚えている試合がある。あれは、確か3年生になったばかりのリーグ戦。対甲女戦の時だった。あの頃の私は、なぜか甲女にだけは負けたくないと思っていたのだが――

当時、甲女チームには梶川さんがコーチとして付いて来ていた。「ヤーネ、梶川さんなんか付いてもらって。」「ヤーネ、みんないい弓持って。」いざ試合が始まると、相手の声の大きさにびっくり。「ヤーネ、あんなきたないかけ声…」何でも悪いようになってしまうから、もうどうしようもない。

それでも、50mを終った時点では50点程リードしていて、勝てるかな?と思いつつ30mへ。ところが、10分もたたないうちに、それまで持ちこたえていた雨が一気に降り出した。甲女のメンバーは、さっとレインコートに身を包む。「クリッカーの音、大丈夫か?」梶川さんが忙がしくとび回っている。「フン、やっぱりお嬢さんアーチェリーだな。これ位の雨、どうってことないのに。コートなんか無くってもいけるってとこ見せてあげる。」そう思って、私はわざとコートを着なかった。

ところが、それから雨はひどくなる一方。3枚重ね着していたのに中までぐっしょり。肩が冷えて、フォームが縮む。縮んだフォームでクリッカーを無理に落とそうとするからもうメチャクチャ。他のメンバーもそれぞれ調子が狂って苦戦。結局、逆転されてしまった。何とも言え

ない敗北感。悔しさと寒さでガタガタ震えながら弓を片付けていた時、梶川さんがボソッと一言。「なあ、松下。雨に勝てると思たらあかんで。おれも昔は、これくらいの雨と思って無茶したけどな。」

気力があれば何でも出来ると思っていた頃のこと。自分にとってのマイナス要因をわざわざ作って、そこで歯をくいしばっても、それは無茶でしかなく、何の意味も無いことを教えてもらった。まだ、かけ出しの頃の貴重な体験である。

27回生 平木重成

拝啓 神大洋弓部殿

早いもので、初めて君に会ってから、もう7年になります。君はまだ13才でしたね。上島さん(第13代主将)のいつもの「曇天無風、絶好のコンディションや、ノ頑張っていこうぜ。」に励まれて、風のある日も、雨の日も皆んな君とスクラムを組んでいた様に思います。

君が、笹岡さんとお付合いを始めた後も、私は、まだかなりの間、ただ弓を引くだけでした。仲間が順番に距離を射つのが精一杯でした。新人戦が間近にせまった頃、まだ15mが遠く感じ、そんな時、ひょっとして、君と僕とは、うまくやっっていけないんじゃないか、と思った事さえありました。幸い、君が新しく、原田さんとお付合いする様になった頃から、何とか射てるようになりました。君と私の一番熱い時期だった様に思います。

そして、君が16才になった時、小川君を中心とした私達が、新しいパートナーになりました。いろいろ、してあげたい事はあったのですが、結局、何ひとつ満足にできなかったことが残念です。しかし、皆んな無我夢中で頑張りました。試行錯誤も多かったけれど、それでも、少しずつ前に向かって歩いてきたと思います。

そして今、君は20才になりました。20の世代に見守られながら、随分と立派になりましたね。280人を越える人達と共に汗を流し、君はしあわせです。そんな君と親しくでき、私も幸せです。神戸を離れた今、以前の様に親しく君とお付合いすることは出来なくなりましたが、それでも年に1~2度は、お会いしたいと思います。これからも日本のどこかで君を見守っています。同じ様に280人の人達が、世界のどこかで君を見守っているはずです。君がますます大きく、逞しくなることを願っています。さらに御活躍されることを祈っています。

敬 具

28回生 山本真理

◇ 花よりだんごの17代 ◇

第17代の女子は、「花の8人組」と陰でウワサされ、自称してただけに、これといった華々しい活躍もなく、花よりだんご、枯山の部屋で四方山話に花を咲かせる毎日でした。

少し覗いてみると…

「点が出ると人が変わるねえ〜。」

「弓をしていると、人間がせこくなるな。」

「私も、人が変わるぐらい点を出したいワー。」

「今日は、クラブが終わったら何を食べに行こうか?」と言った具合でした。

何と言っても私達の欠点は、点への執着心がなく、食べ物への執着心が人一倍強かったことです。

⑩(皆が疲れはて、たくあんすらのどを通らないという春の合宿で、朝から平然と友人のごはんをよそう風をしながら、こっそり自分のお茶碗に、山盛り三ばいよそっていたというかぐや姫。)

あこがれの先輩に胸をはずませ入部しましたが、デビュー戦ともいえるリーグ戦で惨敗し、2部転落という憂き目を見た私達にとっては、1部昇格は悲願でした。しかし、実力模様がまざまざと描かれてくると、いつしかそれも夢のまた夢となり……。2部が安住の地となってしまうました。

卒業後も年に何度か集まっています。今や学生時代のことを思い出す間もなく、アクセクとした毎日を送っている私達ですが、四年間をともに過したクラブの思い出に、しばし浸れる大切な集いです。

8人の出会いである洋弓部が益々発展されますことを祈っております。

第17代女子部一同

29回生 藤本祥子

コンクリートの上で多数の人が赤い服に白いGパンをはいて、ワイワイいってました。よくみると大きな弓を持って腰に矢をぶらさげてウィリアムテルみたい。「かっこいい。」……大学に入って2日目のお昼休みでした。そんな単純なきっかけで部屋に通いはじめて約3年間、少しもかっこよくなりないうちに追い出されてしまいました。

せこいスポーツだから性格に合わないなんてみんな文句を言いながらもレンジに集まって

いたのは、ただひたすらに人とつながりがあったからです。シビアな雰囲気でもこうとしてもすぐにat homeになってしまう練習。試合中でさえ笑いが出るクラブ。アーチェリーというスポーツより、あのだるさにひかれて人が集まっていたようです。

20周年に達するまで各学年ごとの特色があったらと思います。一部で活躍されていた学年。たまたま二部に転落してしまった学年。一部にあまりそこねた学年。etc

あれほど体育会らしくないクラブにしていたのは私達29回生だけかもしれません。でもトップアーチャーになることよりも、もっと大切な、素敵な仲間を持つことができました。大学時代を終えた今でもとても幸せだと思っています。

20年という大きな山を越えて、ますます責任が重くなっていく現役のみなさん。大変だとは思いますが、苦勞している時が一番楽しいんですから、ファイトでつばして下さい。

いろんな遊びを教えてください。神大アーチェリー部の発展をお祈りしております。

30回生 西 島 優

思いおこせば3年の春、自分でも信じられないぐらい点数がでだし、何をやってもよく当たった。この頃は、東西戦にはあまり関心がなく、ほとんど気にとめていなかった。

リーグ戦第1戦目めちゃくちゃ緊張する。自分でも顔がひきつっているのがよくわかった。しかし予想外に615点もでた。この時東西戦を意識し始める。第2戦目点数を意識しすぎて571点と崩れてしまい東西戦への道が遠のく。その上次の日リムを折ってしまい、大いにめげるが、リムをかえるとなんと自己新がでて再び調子となる。そして第3戦目なんと637点もでて「残り2戦620点台でいけば東西戦に出れる。」と考え以後必死に練習し、第4戦目緊張しながらも626点を出し一歩近づく。しかしこの時期から授業が始まり第5戦目までほとんど練習がいきず不安ながら第5戦に望む。そして第5戦目びびりながら624点をだして、best3試合abe629点個人第6位となり、西軍選手予選会へ出て、やっとの思いで東西戦への切符を手にした。

東西戦の開会式の時、今自分がここにいることが信じられなかった。そしてあっという間に試合が終り、点数的には今ひとつであったが、たくさんの人と知りあいになれ、楽しいことがたくさんあり有意義であった。そして試合が終わった今でも東西戦に出たことがほんとうに信じられないでいる。

特 別 寄 稿

大 阪 市 立 大 学 洋 弓 部

主将 内 田 真 嗣

20周年おめでとうございます。

20年ともなれば、OBの方々の中には、現在使用されている弓具および、普通に出される点数が、想像を絶するという方も、少なくないのではないのでしょうか。また、20年前といえは、現役の方が生まれるかどうかのせとぎわといったところでありましょう。その歴史の深さは、我々の想像する以上のものと思います。

我々、市大洋弓部で、神大と言えは、まずその人数の多さが頭にうかびます。個人戦などで、神大洋弓部の円陣を見るにあたって、その人数の多さに圧倒されるばかりであります。我が、市大洋弓部も、昨年15周年を迎え、今年は現役の人数が40人近くにもふくれ上りました。人数は多いほどよいようにも思われますが、多ければ多いで、その人数がために新たに問題も生じて来るもので、貴部の幹部の方々にも、少人数校にない苦勞があるものと思います。しかし、人数が多いということの利点は、やはりどんな苦勞にも勝るものと思います。今後とも、その人数をたやさぬよう、そしてリーグ戦での一層の活躍をお祈りいたします。

以上をもちまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

関 西 学 院 大 学 洋 弓 部

女子リーダー 永 井 操

神戸大学体育会洋弓部創設20周年、誠におめでとうございます。心よりお慶びを申し上げますとともに、貴校が築き上げてこられた20年間の歴史、そしてそれを支えてこられた先輩方、現役の皆様に対して敬意を表します。

我が校も、私が入学した年に、「創立21周年」記念レセプションが開催されました。その時、1年ながらも、このような歴史あるクラブの1ページを刻めることを誇りに思うと同時にクラブの伝統と歳月の重さに大きな責任を感じずにはいられませんでした。貴校の部員の皆様も、きっと今、これと同じ想いを抱いておられることと思います。20周年をひとつの区切りといたしまして、伝統に恥じぬような新たな年輪を刻みつけていけるよう、お互いより一層の

努力をしていかなければならないと思います。

最後になりましたが、神戸大学体育会洋弓部がますます御発展、御活躍されますことをお祈り申し上げます。

京 都 大 学 洋 弓 部

主将 荻 谷 尚 人

神戸大学洋弓部創部20周年、誠におめでとうございます。

アーチェリーは決してメジャーとは言えず、知らない人の多いスポーツではないでしょうか。かく言う私も、高校までは見たり聞いたりした事はありませんでしたが、実際に弓を引いてみた事は一度もありませんでしたし、モントリオール五輪である道永さんが、銀メダルを獲られた時も、「へえー、アーチェリーねえ。」などと思っていました。

しかし、大学に入学してアーチェリーを始めてみると、これ程奥の深いスポーツはないと思うようになりました。

その頃初めて見た試合が、京大対神大の定期戦でした。日頃笑いの絶えないレンジが、この日ばかりは緊張でビーンと張りつめているようでした。

以来私が幹部となるまで、ずっと対神大定期戦には負け続け、大変申し訳ないと思っています。

実力的には相当差があると思いますが、同じ国立大学として、二部で活躍された神大さんを目標に、来年度以降のリーグ戦に臨み、早く同じ土俵に上れるよう努力してゆきたいと思っています。

神戸大学洋弓部の益々の御発展、御活躍をお祈りして、私の挨拶とさせていただきます。

甲 南 大 学 アー チ ェ リ ー 部

主将 辻 埜 茂 樹

神戸大学体育会洋弓部、創立20周年おめでとうございます。甲南大学現役・OB一同、心よりお慶び申し上げます。神戸大学と我校は地理的にも近く、長年リーグ戦や練習試合で交流

を深めてまいりました。

一口に20年と申しましても、その長い歴史には、さまざまな困難、多くの変化があったことと思います。それをのり越えて、ここに20周年を迎えられますのも、ひとえに、貴校の先輩諸氏の御尽力の賜物だと思います。

我校も、昨年20周年を迎え、1つの区切りの時期を迎えました。

57年には、リーグ戦の形態変更も予定され、関西学生アーチェリーも、新しい時代を迎えようとしています。その中で、貴校、我校共に20才の成人を迎えたクラブとして、アーチェリー界の、今後の発展に大きな役割を果せるよう努力して行かなければなりません。それと共に、神戸大学と我校が、末長く、良き友、良きライバルとして競い合えることを願うしだいです。

最後になりましたが、神戸大学洋弓部の益々の御発展と、御活躍をお祈り申しあげて、お祝いの詞とさせていただきます。

神戸学院大学洋弓部

主将 江 国 滋

神戸大学洋弓部創立20周年を心から御慶び申し上げます。

20年、その時の流れの中で貴校は数々の実績を残されてきました。その長い年月の中に多くの先輩方の並々な御努力、御苦労があったと想像されます。

今年の春、幹部としてクラブの運営を任せられ、それまで考えもしなかった多くの問題があるのに気づきました。

試合で勝たねばならないということは体育会系クラブの宿命かもしれません。試合の結果によって多くを評価される為でしょう。

リーグ戦のことを常に考えながらクラブの運営をしていかなければなりません。計画を立て、如何に練習し、如何に皆を引っばっていくか。それに関わる多くの問題が有ります。

ただ単に勝つことに馬車馬になるのは危険かもしれません。クラブという組織を通じ何かを得、何かを残したい。それが本来の学生スポーツの姿でしょう。しかし、しっかりとした目標なしに、それは出来ないと思います。その意味で試合に勝つことは一つの目標にすぎないので。目標を追求することによりきびしさを持った組織からこそ多くの得るものがあると考えます。

まだ幹部になって日の浅い私が、分ったようなことを書いてしまいましたが、この様なことはほんの一面にすぎず、先輩諸氏の方々はもっとより多くの、より大きな問題に直面され、それを一つ一つ乗り越えてこられたと信じます。そしてこの伝統を受け継ぎ築いてこられた先輩諸氏ならびに部員の方々に改めて敬意を表します。

来期より同じ一部で戦うこととなりました。優勝をかけて戦う日が来ることを心より願っております。

最後に今後の神戸大学洋弓部のより一層の御発展、御活躍をお祈り致します。

親和女子大学洋弓部

主将 大内 富美子

神戸大学洋弓部20周年おめでとうございます。我親和女子大学洋弓部創立以来、神戸大学洋弓部には多大なる御尽力を承わり、大変に感謝しています。

考えてみますと、長い年月のおつき合いです。なにしろ、私達の先輩と神戸大学洋弓部のOBの方との交流がなければ学連にも加盟できず、一部まで昇格するということもなかったでしょう。神戸大学4回の方に、コーチに長い間来ていただきました。神戸電鉄でえちらと山奥の田舎にまで足を運んでいただき、大変御苦労のことだったろうと思います。

ところで、今でも神戸大学のコーチが残して下さった物があります。我々は何代のコーチの方が作って下さったのか知りませんが、鉄の三脚です。今も一年の近射に使わせていただいております。それから弦作り機です。私は弦はうまく作れませんが、あれで一生懸命つくってみようかと思っています。他はもまだ私の知らない所にいくつかの痕跡を残されていることと思います。

未熟な私達ではありますが、この度、子供が親を離れていくように、神戸大学のコーチからはばたき、我親和女子大学洋弓部として一人立ちして行こうということになりました。長年の教えを忘れず、今度は私達で頑張ってやって行きますので、どうか見守ってくださるようお願い申し上げます。

これからも、秋の定期戦、新人戦等、両校の親睦がますます深まり、両校の発展を切に願っています。

成蹊大学アーチェリークラブ

主将 箕浦 樹一

クラブ創立20周年、おめでとうございます。我々、成蹊大学アーチェリークラブが、神戸大学と交流を持つようになりましてから、数年がたとうとしております。最初は秋に行なわれる定期戦のみであったのが、二年前から夏の合宿先である白馬において、交換合宿が加わるなど、親交の輪は広がりがつつあります。

秋に行なわれる定期戦は、各校が隔年、遠征という形で行なわれるのですが、今年は、我々が神戸大学に遠征する年になっており、今から、クラブ員とその日を楽しみにしており、毎日、練習にはげんでおります。その節にはよろしくお願いいたします。

夏の交換合宿は、始めてまだ三回と、日は浅いのですが、二年生の交流という意味で、大変意義があることと思っています。これからも、機会ある度にこういう場を設けたいと思っています。

我々も昨年、クラブ創立20周年を迎えたわけですが、我々同様、神戸大学の方々も、30年40年と、クラブの歴史を築いていく新たなスタートラインに立ったつもりで、これからも、クラブの伝統を守り、また、新しい息吹をふきこんで、強い楽しいクラブ作りがんばって下さい。神戸大学と成蹊大学のクラブのカラーはだいぶ違いますが、異なるカラーを持つクラブの交流から、何かを得ることが出来、またそれがそれぞれのクラブ作りに役立てば、それに勝るものはないと思っています。我々も神戸大学に負けずに、これからも精進していきたいと思っています。この後も神戸大学と成蹊大学との親交がますます深くなることを祈って、簡単ではありますが、お祝いの言葉とさせていただきます。

帝塚山大学 洋弓部

主将 渭東 伸江

神戸大学洋弓部創立20周年を心から御慶び申し上げます。

昨年のリーグ戦におきましては、1部残留を果たした私どもではありますが、あの貴校の自信と気迫には、圧倒され、今でも強く印象に残っております。

また、来年のリーグ戦は、ブロック化ということで、再び貴校と一戦交えられることをうれしく思います。そして、優勝を争えるようになるため、いや、日本一のチームをめざし、おた

がいがんばろうではありませんか。

さて、アーチェリー好きの人間が集まったクラブの第1目標は、試合に勝つことだと思われます。しかしながら、試合に勝つと同じ位、大切だと思われるのが、クラブにおける人間形成、人間関係だと思えます。人間形成ができて、連帯感が生まれ、そこから、みんながひとつの目標に向かって前進していくことができるはずです。貴校には、それだけの実力を備えておられると確信しております。

今まで同様、貴校との交流を切に希望いたしますと共に、今後の益々の御発展をお祈り申し上げます。

一 橋 大 学 洋 弓 部

主将 土 田 圭 滋

神戸大学体育会洋弓部の創立20周年を心よりお慶び申し上げます。比較的新しいスポーツであるアーチェリーにおいて20年の伝統はすばらしいものであります。

神戸大学と一橋大学との結びつきと言えば三商大戦であり、洋弓部の交流は、1968年以来今年で14回目を迎えます。毎日白熱した試合とユニークなレセプションを通して互いに技を競い合い、友好を深められることは、大学スポーツにおいて非常に有意義なものです。

このような伝統ある行事を築きあげてくださった先輩の方々に対し改めて感謝いたします。

さて、私共一橋大学洋弓部は、今年春のリーグ戦におきまして四部優勝、三部昇格を遂げ、今年こそは神戸大学に迫りたいと部員一同例年になく張り切っております。

おわりに、神戸大学体育会洋弓部の益々の御発展と御活躍を祈念いたします。

桃山学院大学洋弓部

主務 木下 徹

神戸大学アーチェリー部が、創設20周年を迎えられました事を心よりお慶び申し上げます。

20年間、貴校が築き上げてこられた伝統と実績に、そしてそれを支えてこられた先輩方、現役部員の皆様に敬意を表します。

貴校と我校との間で毎年行なわれている対定期戦、甲南大学を加えての三校対抗新人戦でのライバル意識、そして試合後の両校の友好が、我々にとっても良き刺激、そして楽しみになっております。

我校も今年20周年を迎え、この20年という歳月の重さとクラブの伝統というものを強く感じ、新たなる決意を持っております。貴校の現役部員の皆様も今、これと同じ気持ちなのではないでしょうか。

お互いに、このような伝統あるクラブの中で学生生活を送れることを誇りに思うと同時に、自分達の手で新しい年輪を刻むように、努力を続けて行きましょう。そしてリーグ戦において1部優勝を争えるチームになるように、お互いがんばりましょう。

最後になりましたが、貴校のより一層の御活躍をお祈り申し上げます。

立命館大学アーチェリー部

主将 間瀬 公文

貴部におかれましては、この度、創部20周年をお迎えになられましたことを心からお慶び申し上げます。

さて貴部と当立命館大学体育会アーチェリー部は、定期戦を通じて親睦をはかるばかりでなく、リーグ戦におきましてもよきライバルとして、一点を争うような好勝負を演じてまいりました。

その結果、数々の逸材が輩出され、多数のOBの方々が社会のあらゆる方面で御活躍されて

おられます。

このような伝統をうけつぐ両部は、関西学生アーチェリー連盟校の中でも最も古い伝統を誇り、学連のリーダーシップをとるべき立場にあります。

幸いにも両部とも来年度より念願の一部昇格を果たすことができました。

今後とも互いによきライバルでありつづけるとともに、関西学連の水準の向上に努め、ひいては日本のアーチェリー界全体の水準の向上をはかれませう、切磋琢磨してゆきたいと思えます。

今後とも貴部の一層の御発展を心よりお祈り致しまして、お祝いの御挨拶とさせていただきます。

早 稲 田 大 学 洋 弓 部

女子リーダー 橘 晴 子

神戸大学洋弓部が創立20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

我が早稲田大学洋弓部も昨年20周年を迎え、女子部も今年で十代目となりましたが、創設の頃から、貴校の女子部とは毎年定期戦を組んで、共に向上を目指す良き仲間としておつきあい願ってきました。

活躍の場が違っても、弓に対する情熱、リーグ戦への意欲が同じだからでしょうか。年に一度しか会えなくとも、つい先日会ったばかりの親友に会うような心安さを覚えます。

定期戦では、互いの培ってきた実力を発揮しあう場として火花を散らしく今年は、リーグ戦での実力を見せていこう、と張り切りました。)、その後で互いの親睦を深めあうところは、まるで、喧嘩した後、手を取りあって笑いながら仲直りをしてしまい友達同志のような、さわやかさを感じます。

合同練習では貴校の練習内容もわかり、今後の練習の参考にさせていただきました。また、関西と関東の試合運びの違いなども大変勉強になりました。

ところで、神戸大学と言いますと、見晴らしのよい丘地の広大なキャンパスを思い浮べます。

自然の中で練習できることはうらやましい限りです。

今年のリーグ戦では、早稲田女子も一部に返り咲くことができ、これからは、どのように一部での地位を維持、向上していくかが課題です。貴校女子部も早く一部復帰されることを心から願っています。次の機会には、一部校同志としての定期戦を行なえるよう、お互いに頑張りたいものです。

最後になりましたが、貴校の今後の御発展と御活躍を期待するとともに、一層の親交を深めあえますことを心からお願い申し上げます。

ク ラ ブ の 現 状

第 20 代主将 小 浜 透

現在、我部には50名もの部員がいます。この数字だけをきいていると、なんら問題はないのですが、その裏には口にするのも恐ろしい秘密が隠されているのです。な、なんと一回生が6名しかいないのです。これはすべて我々幹部の責任であると反省している次第です。しかし、そのために最も寂しい思いをしているのも幹部であって、一回生全員がすばらしいアーチャーへ育ってくれると期待しております。`NO MORE DOTSUBO ARCHER`

練習は水・土曜日の一斉練習に加え班別練習を週一回行っています。これは、全員をいくつかの班に分けて、その班ごとにまとまってあいている時間に練習するというものです。このように、一応週3回の練習となっていますが、試合が近づくと毎日練習を行っています。ところが、授業・バイトなどの理由から一斉練習にすべて参加できるというわけではありません。学部によっては週1・2回しか練習にでてこないものもいます。そこで練習に参加できないものは、あいている時間に自由練習をするわけです。しかしこの自由練習も個人の意志まかせであるので、人によって練習量にかなりの差がでてきます。これが我部の最大の問題点です。

大学スポーツとしてアーチェリーをしている以上、点がすべてだとは言えません。しかし弓に対する熱意・努力がなくてはなんのためのクラブだかわかりません。クラブ全体が一人残らず真剣にリーグ戦という目標に向かってぶつかっていけば、その時こそ我部は最高のクラブになれると思います。そして、そのような姿勢を続けていけば、神戸大学洋弓部は王座をとれるチームになれると確信しています。一部に昇格したことで気を緩めず、次のより大きな目標に向かってクラブ一丸となって燃えることが必要となっています。

現 部 員 に よ る 一 言

20周年やし、今年は点でるはずやねんけどなー (A・あずま)

ARCHERY道とは、栄枯盛衰、復活不可能、労+∞にして、功0と見つたり (セミの人生)

20周年ということは僕の年令と一緒にわけて、よく続いたものだなあ (いわみ)

やれ射つな 俺が手を振る弓を振る (マッキーニ岩本)

ムムッ!メッチャンコ重い。これぞ20年の重み、ナンのコッチャ (SUPER RIDER)

絶好調といつもいきがるオフシーズン (いつも弓を持ってる射手座くん)

めざせ歴代新記録、成蹊戦三年連続11的 (カゼをひき、レセプション欠席した子)

今事情があって休部しています。はやく復活したいものだなあ… (みんなのアイドル・チアキちゃん)

年をとってもできるスポーツです。ガッツファイト ね、畔堂さん (K・S)

ノルマ8ラウンドのところを、1ラウンドしか射てませんでした。すいません。 (げんずすんず)

用語申請「白に出た♡」→「シルバーに入った!」 (by 貴公子キッコーマン)

2年間のボトム生活は長かった。が、今だ沈黙してるM・I君より良い。 (豊田耕司)

点も試合も出ました。メンチェンもされました。後は引退を待つだけです。 (M・N)

世界のトップアーチャー — D・ベイス、世界一険悪な男 — 日笠宏昭 (T・B)

やったぞ、早気克服! (H・H)

こんなもん書いてられるか ボケ~!?!?! (冗談の好きなM・Hでした)

KENNIN FUBASTU (ワルオ)

ドロドロアーチャーにはまだ負けないぜ。 (ドロアーチャー)

試合に出る可能性のない人間は納射会に向かって調整するのです。 (西宮球場のカンコ鳥)

アーチェリーで私の腕は傷だらけ。 (Y・O)

エレファントマンの時代は終わったけれど、私の時代は終わらない。 (KEIKO)

困ったな、何かいていいかわからへん、そんなにあせって集めんとして
(じゃんけん弱い子)

私は黄色と赤色と青色は嫌いなんです。
(元矢つがえの主)

私の鼻がもう1cm高ければトップアーチャーになっていたろう
(M・T)

あの日、部室の前さえ通らなかったら…
(ランニング大好き人間)

点を追うのみではなく愛と笑いの中で存在感を残したい。
(ひらめ)

クラブにとっては蚊のような存在だが、しつこくがんばりたい。
(近射の枯花)

アーチェリーはアホになる事が大事です。タバ～
(単位と得点をはかりにかけた人)

不足ある限り私には射つ必要がある
(Y・O)

万物斉同 無為自然
(M・O)

弓具にかけたお金で車を買えばエカッタ!
(K・K)

丘のむこうに、まぶしい光があった。— ああ、青春
(チイ)

一射入恨
(T・S)

Ave 5杯、スランプじゃ
(K・T)

男やったら一発きめたらうぜ!!
(つぶしやのタカ)

アーチェリーをしてやせよう!!
(T・M) part 1

クラブにばかりお金をとられて、少しもお金がたまりません!!
(T・M) part 2

山田にまかした
(顔面手術を受けにいったイレちゃんより)

働けど金が吹き飛ぶ 洋弓部、今日も下宿でじっと手を見る
(Y・Y)

空に放った矢は雲の上… こんにちは、さわやかさん!!
(Y・I)

色白の美しいOGになってクラブに遊びにくることが私の夢
(あられ)

りっぱな1年生をトップアーチャーにするための幹部になる
(I・K)

アーチェリーを始めて早、一年余り……。まさに光陰矢のごとしなのです。 (S・S)

アーチェリーは難しいがおもしろい。 (M・I)

簡単なスポーツだと思って洋弓部に入った。今、その奥深さを感じ始めている。 (K・T)

なななんと20周年ですと、ノまっことにめでたいことじゃ、ノ (Y・N)

ゴールドに入らないとイライラして精神的に不健康だ。(編者：10年早い、ノ) (M・M)

この頃、ハイスクールララバイが頭にこびりついて困っています。 (I・Y)

クラブより年下だけど、一生懸命に頑張りたいと思います。 (A・O)

リ　　グ　　戦　　戦　　績　　(1965～1981)

男　　子

§ 第 5 回　　二部　　(1965 S40)

× 神 大 3947-4181 桃 大 ○
 ○ 神 大 3901-3818 大工大 ×
 ○ 神 大 4032-3498 大外大 ×
 2 勝 1 敗 (2 位)

§ 第 6 回　　二部　　(1966 S41)

○ 神 大 4231-4220 大工大 ×
 ○ 神 大 4264-4103 立 命 ×
 ○ 神 大 3894-3331 大外大 ×
 3 勝 0 敗 (1 位)

入替戦

○ 神 大 4215-4078 大府大 ×
 一部リーグへ昇格

§ 第 7 回　　一部　　(1967 S42)

× 神 大 4329-4428 桃 大 ○
 × 神 大 4138-4353 同 大 ○
 ○ 神 大 4138-4092 関 学 ×
 ○ 神 大 4303-4246 甲 南 ×
 ○ 神 大 4305-4295 関 大 ×
 3 勝 2 敗 (3 位)

§ 第 8 回　　一部　　(1968 S43)

× 神 大 4046-4448 桃 大 ○
 × 神 大 4266-4556 関 大 ○
 × 神 大 4178-4354 関 学 ○
 × 神 大 4354-4486 同 大 ○
 ○ 神 大 4163-4142 甲 南 ×
 1 勝 4 敗 (5 位)

女　　子

§ 第 1 回

× 神 大 1167-1644 同 大 ○
 × 神 大 1442-1686 甲 南 ○
 × 神 大 1514-1635 関 学 ○
 ○ 神 大 1436-1346 立 命 ×
 1 勝 3 敗 (4 位)

§ 第 2 回

不 参 加
 (不 明)

§ 第 3 回

不 参 加
 (不 明)

§ 第9回 一部 (1969 S44)

- × 神大 4390-4592 桃大○
 - × 神大 4400-4418 同大○
 - × 神大 4323-4362 関大○
 - × 神大 4285-4383 関学○
 - 神大 4431-4389 学院×
- 1勝4敗(6位)

入替戦

- 神大 4379-4358 京産×
- 一部リーグに残留

§ 第10回 一部 (1970 S45)

- × 神大 4380-4494 桃大○
 - 神大 4378-4255 学院×
 - 神大 4317-4213 関大×
 - 神大 4380-4330 同大×
 - 神大 4349-4322 関学×
- 4勝1敗(2位)

§ 第11回 一部 (1971 S46)

- × 神大 4601-4731 桃大○
 - 神大 4483-4361 同大×
 - 神大 4377-4271 学院×
 - 神大 4431-4371 大工大×
 - 神大 4542-4293 関大×
- 4勝1敗(2位)

§ 第12回 一部 (1972 S47)

- × 神大 4281-4633 桃大○
 - × 神大 4154-4528 同大○
 - × 神大 3618-3896 大工大○
 - × 神大 4131-4176 京産○
 - × 神大 4026-4240 学院○
- 0勝5敗(6位)

§ 第4回 二部

- × 神大 2279-2429 帝大○
- 0勝1敗(2位)

§ 第5回 二部

- 神大 2234-2233 関学×
- 1勝0敗(1位)
- ※ 翌年度より一部リーグが6校制
になり昇格

§ 第6回 一部

- × 神大 2292-2570 梅花○
 - × 神大 2168-2396 甲女○
 - × 神大 2129-2468 同大○
 - × 神大 2183-2392 帝大○
- 0勝4敗(5位)

§ 第7回 一部

- × 神大 2468-2629 同大○
 - × 神大 2409-2437 梅花○
 - 神大 2083-2004 甲女×
 - 神大 2448-2336 帝大×
 - 神大 2230-2102 近大×
- 3勝2敗(3位)

入替戦

× 神 大 4202-4439 関 大 ○
二部リーグへ降格

§ 第13回 二部 (1973 S48)

× 神 大 4225-4309 近 大 ○
× 神 大 4143-4192 関 学 ○
○ 神 大 4212-4206 立 命 ×
× 神 大 4204-4305 大府大 ○
○ 神 大 4001-3947 追 大 ×
2 勝 3 敗 (4 位)

§ 第14回 二部 (1974 S49)

○ 神 大 4550-4476 大府大 ×
○ 神 大 4363-4331 甲 南 ×
○ 神 大 4230-4202 関 大 ×
○ 神 大 4266-4244 関 学 ×
○ 神 大 4270-4139 立 命 ×
5 勝 0 敗 (1 位)

入替戦

○ 神 大 4454-4305 大工大 ×
一部リーグへ昇格

§ 第15回 一部 (1975 S50)

× 神 大 4360-4689 近 大 ○
× 神 大 4314-4506 同 大 ○
× 神 大 4298-4517 京 産 ○
× 神 大 4264-4585 学 院 ○
× 神 大 4270-4506 桃 大 ○
0 勝 5 敗 (1 位)

入替戦

× 神 大 4132-4601 甲 南 ○
二部リーグへ降格

§ 第 8 回 一部

× 神 大 2426-2509 同 大 ○
○ 神 大 2413-2037 関 学 ×
× 神 大 2419-2482 甲 女 ○
○ 神 大 2560-2399 帝 大 ×
○ 神 大 2517-2355 梅 花 ×
3 勝 2 敗 (3 位)

§ 第 9 回 一部

× 神 大 2644-2701 同 大 ○
× 神 大 2287-2366 関 学 ○
× 神 大 2626-2746 帝 大 ○
○ 神 大 2435-2323 甲 女 ×
× 神 大 2279-2291 親 和 ○
1 勝 4 敗 (5 位)

§ 第10回 一部

× 神 大 2634-2778 関 学 ○
× 神 大 2733-2750 同 大 ○
× 神 大 2504-2640 甲 女 ○
○ 神 大 2655-2569 帝 大 ×
○ 神 大 2655-2455 親 和 ×
2 勝 3 敗 (4 位)

§ 第16回 二部 (1976 S51)

× 神大 4225-4686 立命 ○
○ 神大 4460-4336 関大 ×
○ 神大 4545-4318 大工大 ×
○ 神大 4549-4430 追大 ×
○ 神大 4542-4417 大府大 ×
4勝1敗(2位)

§ 第17回 二部 (1977 S52)

× 神大 4627-4771 学院 ○
× 神大 4350-4440 追大 ○
○ 神大 4637-4526 阪南 ×
○ 神大 4579-4307 大工大 ×
× 神大 4572-4586 関大 ○
2勝3敗(3位)

§ 第18回 二部 (1978 S53)

× 神大 4525-4569 神学 ○
○ 神大 4703-4643 追大 ×
× 神大 4574-4584 関大 ○
○ 神大 4595-4552 阪南 ×
○ 神大 4592-4389 京産 ×
3勝2敗(2位)

§ 第19回 二部 (1979 S54)

× 神大 4560-4583 追大 ○
× 神大 4458-4507 大府大 ○
○ 神大 4556-4492 関大 ×
○ 神大 4774-4617 立命 ×
○ 神大 4354-4231 阪南 ×
3勝2敗(3位)

§ 第11回 一部

× 神大 2723-2774 同大 ○
○ 神大 2738-2546 関学 ×
× 神大 2392-2428 甲女 ○
○ 神大 2615-2529 帝大 ×
○ 神大 2621-2466 関大 ×
3勝2敗(3位)

§ 第12回 一部

× 神大 2671-2730 同大 ○
× 神大 2743-2762 関学 ○
× 神大 2540-2625 帝大 ○
× 神大 2540-2595 甲女 ○
× 神大 2620-2634 梅花 ○
0勝5敗(6位)

入替戦

× 神大 2581-2779 関外大 ○
二部リーグへ降格

§ 第13回 二部

× 神大 2506-2569 追大 ○
○ 神大 2489-2468 甲南 ×
○ 神大 2605-2531 関大 ×
○ 神大 2492-2450 山手 ×
○ 神大 2509-2467 親和 ×
4勝1敗(2位)

§ 第14回 二部

× 神大 2468-2860 甲女 ○
○ 神大 2751-2645 桃山 ×
○ 神大 2678-2287 甲南 ×
○ 神大 2490-2204 関大 ×
○ 神大 2611-1924 山手 ×
4勝1敗(2位)

§ 第20回 二部 (1980 S55)

× 神大 4139-4658 神学○
 ○ 神大 4585-4452 京産×
 × 神大 4644-4646 立命○
 ○ 神大 4695-4378 関大×
 ○ 神大 4604-4416 大府大×
 3勝2敗(4位)

§ 第21回 二部 (1981 S56)

× 神大 4617-4673 桃大○
 × 神大 4500-4768 関大○
 × 神大 4530-4543 京産○
 × 神大 4274-4308 立命○
 ○ 神大 4700-4551 大産×
 1勝4敗(5位)

§ 第15回 二部

○ 神大 2669-2524 甲南×
 × 神大 2635-2660 竜谷○
 ○ 神大 2769-2478 追大×
 ○ 神大 2808-2483 関大×

順位決定戦

神大 - 甲南 - 竜谷
 2665 2622 2545
 3勝1敗(1位)

入替戦

× 神大 2768-2778 帝大○
 二部リーグ残留

§ 第16回

× 神大 2634-2808 甲南○
 ○ 神大 2585-2541 竜谷×
 ○ 神大 2570-2562 神薬×
 ○ 神大 2588-2479 関大×
 ○ 神大 2613-2444 追大×

順位決定戦

甲南 - 竜谷 - 神大
 2719 2679 2598
 4勝1敗(3位)

資料：関西学生アーチェリー連盟発行

「ARCHERY」20周年記念特集号

「WESTERN ARCHERY」No. 20

その他

備考：各回の試合記載順はリーグ戦における試合の日程順とは関係ありません。

編 集 後 記

神戸大学洋弓部20周年記念誌を編集、発行するという重責を引き受けてから、早や6カ月が過ぎてしまいました。実は川口の場合は、文系で、暇な六甲台の住人という世論の圧力に屈する形で、また、服部の場合は、なんとジャンケンに負けて、この仕事を引受けたのですが、やっと今、編集後記を書くまでにこぎつけることができました。

初めの間は、何もすることがなくて、「なんて楽なこっちゃ」と思っていたのですが、この思いははかなく破れ、ここ2週間程のやたら忙しかったこと。そうなんですよ。試験期間と原稿の整理とが重なってしまったのです。「アー！テストどないしてくれる！」単位がどんどんとんで行ってしまいます。法学部の債権、民訴、保険法…。教育学部の教育衛生学、日本教育史…。河本先生、神様、仏様と心に念じつつ、原稿の判読と清書に励んでまいりました。

影の声あり：スコアではとうてい名前が残らへんのやから、せめて編集でもやって、クラブの歴史に名前を残さんとなあ。これで試験成績の言い訳ができたんとちがうか、ラッキーなやつやで！etc. ウー！適確なご指摘、ご批判で、編集子はshockの一言です。

これまで編集といった仕事などやった経験がないので、正直のところほんとうに完成するのか、気がきではありませんでした。8月20日のメ切りに手許に届いた原稿はたった8通。これはあかんと、必死に東や西に電話をかけまくり、やっと原稿がそろったときの嬉しさ。美術の才能が未開発のため、あれやこれやと表紙のデザインに苦勞したことetc. いまやっと笑いながらこの後記を書くことができます。ちなみに、表紙のデザインは岩本君の作品です。文句に苦情、またファンレターなどのある方は神大の住吉寮まで！

ついでに、二回生の皆さん（特に一回生）に。「小浜さん、ウソ八百は代名詞、信じるものは損をする。」というアンラソングが下級生の間に密かにはやりつつあるようです。主将をはじめ、われわれ三回生幹部の心情をうまく言い当てている様です。エレファントマンの母親は、彼を生む前に象に踏まれたと信じ切っていたA君。パンツ一つ、チェストガードだけで練習する先輩がいると思いきこんでいたB君。三回生の中にインドのトップアーチャーがいると信じ続けていたCさん。その他の皆さん、三回生への信頼はまことに有難いのですが、ミーティング以外での事はあまり信じない方が無難なようですぞ。

閑話休題、この記念誌の編集を担当して、ほんとうによかったと思ったこと。それは、わが

洋弓部の存在を再認識できたということです。諸先輩方の原稿を拝見して、ほんとうにわが部の伝統の重さと偉大さをひしひしと身に感じました。これからも過去の栄光に恥じることはない、またそれを上回るような立派なクラブとして、成長、発展してほしいと心から願う次第です。

最後になりましたが、校正を手伝って下さった三回生、二回生の女子の皆さん。記録を調べてくれた馬場くん。いろいろと相談にのってくれた主務の細田くん。それから助言をいただいたもろもろの皆さん。ほんとうにどうもありがとうございました。

1981年10月31日

31回生 川口 恭弘
服部 由紀子

